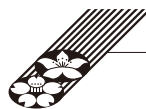


平成24年(2012年)
8/15
第62回社会を
明るくする運動
特集号

広報としま



未来へ ひびきあう 人 まち・としま

主 な 内 容

中央大会「区民のつどい」…………… 1・8面

作文コンテスト受賞作品 …………… 2～7面

発行：豊島区 編集：子ども家庭部子ども課 〒170-8422 豊島区東池袋1-18-1 ☎3981-2187

社会を明るくする運動

犯罪や非行を防止し、 立ち直りを支える地域のチカラ



セレモニーの様子



推進委員長
(豊島区長)

中央大会「区民のつどい」の様子は
8面に掲載しています。



《社会を明るくする運動とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、東京・銀座の商店街の有志の方々が非行の予防等を広く訴えるために昭和24年に開催した「銀座フェア」をきっかけとして、昭和26年に始まりました。その後、法務省の主唱により、毎年7月を強調月間として全国で展開され、今回で62回目を迎えます。



第62回“社会を明るくする運動”の 行動目標・重点事項

《行動目標》

- ① 犯罪や非行をした人たちの立ち直りを支えよう
- ② 犯罪や非行に陥らないよう地域社会で支えよう
- ③ これらの点について、地域社会の理解が得られるよう協力しよう

《重点事項》

「立ち直りを支える取組についての理解促進」
「就労・住居等の生活基盤づくりにつながる取組の推進」



豊島公会堂

社会を明るくする運動にご協力いただいている団体 (50音順)

(寄付金)

株式会社 アール・エス・シー
株式会社 サンシャインシティ
株式会社 藤久不動産
株式会社 東武百貨店池袋店
宗教法人 高岩寺
宗教法人 西福寺
宗教法人 祥雲寺

宗教法人 眞性寺
崇鳴庚申堂奉賛会
藤久地所管理株式会社
東京商工会議所豊島支部
東京信用金庫
豊島区商店街連合会
豊島区町会連合会
豊島区保護観察協会

豊島西ライオンズクラブ
ビー・エム・ワーク藤和

(寄 贈)

崇鳴信用金庫
東京信用金庫
東京都薬物乱用防止推進豊島
地区協議会



小学生の部 中学生の部 作文コンテスト受賞作品

推進
委員長賞

あいさつはまほう

「おはようございます」と私が言う
「いってらっしゃい。気を付けてね」
という言葉がかえってきます。

朝、私はいつも近所の人にあいさつをします。小さいころからずっと家族に
「道に会った人にも、あいさつをしない」と言われてきました。しかし最初は勇気が出せずにはずかしくていました。すると、近所の人達に
「ゆかりちゃん、おはよう。ラジオ体操毎日行ってえらいね。これからがんばってね」
と、いわれました。私は、これからがんばろうと思って「はい」と返事をしました。次の日からは自分からあいさつができるようになって(あいさつは楽しいな)と思いました。

小学生になってから、通学路にある床屋さんに毎日、あいさつをしました。すると床屋さんも帰り道に「お帰り」と返事をしてくれました。私は、とてもうれしい気持ちになっていつもあいさつをしていました。すると、お父さんが床屋さんに行った時、
「ゆかりちゃんは、いつもあいさつをしてえらいですね」と言われて、とてもうれしかったそうです。あいさつの力はすごいなと思いました。

小学校で、友達とけんかした時、私は(もうぜったいにこの子と遊ばない)と思ってしまいました。次の日、友達が「ごめんね」と言ってきたので、昨日の気持ちが消えて、「いいよ」といいました。友達があやまってくれたのですが、次からは先に自分があやまろうと思いました。

私の通っている高松小学校では「あいさつ標語」というのを全校生徒が作ります。私は毎年あいさつの大切さがこの活動でわかり

高松小学校 5年生
おんだ
恩田 ゆかりさん



ます。

また、三年生の時、正門の所で登校してくるみんなにあいさつをしたことがあります。例えば、

「おはよう。そういえば今週当番だったね」やあいさつを返してくれるととてもうれしいのですが、無視して行かれてしまうと、とても悲しい気持ちになります。だから私は、あいさつを必ずしようと思います。私は、あいさつのおかげでたくさん友達ができました。

あいさつは、「人とのつながりを深くする言葉」だと思います。私は、習い事で同じクラスの子に、

「こんにちは、また同じクラスだね」とか、

「おはよう。今日はテストだね」など話しかけます。すると相手も笑顔で返してくれます。

私の名前にある「ゆかり」という言葉は「人とのつながりを大切にしてほしい」という願いから、つけられたそうです。私は、それを聞いて、まるであいさつみたいだなと思いました。だから、私は、だれよりもあいさつを大切にしようと思いました。

また、私は「近所どうしであいさつをしている町は犯罪が少ない」ということをテレビで知りました。近所の人とあいさつをしていると、地域のつながりをふかめることができて、どろぼうがしん入をあきらめることができるからだそうです。

そしてあいさつのおかげで近所の人達も「知らない人」から「知り合い」に変わっていきました。これが全国にそして世界に広がっていけば、みんなが笑顔で仲良くなれると思います。そして地球があいさつでつつまれると思います。そうすれば戦争などがなくなり、平和になると思います。私は、まるで「あいさつはまほうみたい」と思います。なぜなら、小さなひと言で世界が平和になるからです。私は、みんなが自分からあいさつできる社会になればいいなと思います。

常任
委員長賞

いのちが消えるとき

目白小学校 4年生
よねやま
米山 美紅さん



今年の四月、大好きなおじいちゃんが亡くなりました。

私の目の前で横たわっているおじいちゃんは、眠っているようで、死んでしまったという実感はありませんでした。告別式までいっしょにすごしてたくさん話しかけました。

告別式の時、お棺に入ったおじいちゃんにみんなでお花をあげました。その時、急に悲しくなって涙が止まらなくなりました。大きな声で泣いてしまいました。おじいちゃんがいなくなる、と思うと、悲しくて悲しくて仕方ありませんでした。火葬う場へ向かうバス中でもずっと悲しくて泣いていました。火葬が終わってお骨になってしまったおじいちゃんは小さくなってしまいました。

大切な人が死んでしまうということが、こんなに悲しくてつらいことだと知りました。おじいちゃんはきっと天国に行ってたのしくてくれていると思います。でも、残された人はみんな、まだ悲しんでいます。いのちというのは自分だけのものではないのかもしれない。死んでしまうということは、周りの人こんなに悲しい思いをさせてしまうのだから、自分の勝手で命をそまつにあつかってはいけないと思います。

四十九日の法要でご住職が「大切な人の死をきっかけに、自分の命を見つめなおしてください。命が消えてしまうときはだれにでもおとずれます。それを実際に目にした皆さんは、これからどうあるべきか、どうぞ考えてください。」と話してくださいました。

命が消えてしまう時、それは誰にでもどんな物にもやってきます。それはとてもこわいことだし、悲しいことです。私は、おじいちゃんが死んでしまったことで、その事が本当によくわかりました。いままで、命を大切に、と言っているけど、本当は命の大切さをわかっていなかったのかも知れません。いのちを大切にすることというのは、自分のまわりのすべてのものを大切にすることかなと思います。人も、動物も、植物も、本やえんぴつも、私のまわりにあるすべてのものを大切にすることが、自分の命を大切にすることだと思います。

私は、おじいちゃんが死んでしまった時の悲しみを忘れずにいたいと思います。なぜなら、同じ悲しみを私の大切な人たちにさせないようにがんばって生きていくためです。命が消えてしまうその時まで、決してあきらめることなく、努力してがんばっていきたいと思います。

常任
委員長賞

「チェーン修復に挨拶を」

千登世橋中学校 2年
の
やまもと
山本 紀乃さん



事ではなく、誰が起してもおかしくない身近なことだと実感しました。
誰ともつながりを持たなくなった人は、インターネットやゲームにのめりこむようになり、本来あるべきはずの、人を思いやる温かく優しい心が片隅に追いやられて、一方的に自分の不満やイライラをぶつけようします。さらに、残虐で冷たい心が大きくなることもあり、犯罪などにつながる行動をしてしまう人が出てくるのです。

今のような状況を脱するには、たくさんの人と積極的にコミュニケーションを取らなくてはなりません。しかし最近、コミュニケーションをとるのが面倒くさい、一人で家にいたいほうが楽だ、「プライバシーの侵害」だ、という人も少なくありません。ではどうすれば自然とコミュニケーションを取れるようになるのでしょうか。まずは家族とたくさん会話をすることから始まるのではないかと思います。いきなり地域の人とコミュニケーションを取ろうとするのではなく、最も身近なところから始めることが大事です。家族と十分にコミュニケーションが取れるようになったら、次は地域の人々です。

地域の人々とコミュニケーションを取るのは少し難しいと感じます。しかし、挨拶ならだれでも出来ます。私の住んでいる地域の人々は、すれ違うと挨拶をして話しかけてくれます。挨拶をすると自然に人と話したいという気持ちになり、今日は良い天気ですね、この花はきれいですね、などと自分からも話しかけることが出来るようになります。元気な挨拶が飛び交えば、家全体、町全体、世の中全体が明るくなっていくのではないかと思います。

まずは、自分からマンションの中や街中で会う人に元気に挨拶をして、「人との関わりチェーン」を繋げ直す努力をしたいです。そして日本、さらに世界が挨拶の渦に巻き込まれる位にコミュニケーションが活発になり、笑顔が飛び交うようになるために、挨拶から社会を築いていきたいです。

優秀賞

「希望のいのち」

池袋中学校 1年生
の
お
奥野 可奈子さん



「いのち」と聞いたら、人はどんなことを思い浮かべるだろう。私は、「誰にでもあり、絶対になくてはならない大切なもの」だと考える。「いのち」をなくしたら、一生に一度の人生を味わえなくなってしまう。人は、何のために「いのち」を持って生きているのだろう。私は、「幸せになるため」であり、もしくは「幸せにするため」、「夢を追いかけるため」だと考える。だから、殺人や犯罪というくだらないものなんかで、人の「いのち」を「人生」を「夢」をこわしてはいけないんだ。

私が、「いのち」の大切さを学んだのは、小学3年生の時だった。普段から、テレビやドラマを見て沢山知っていた。でも、本気で泣いて苦しんだのは、おじいちゃんの「死」だった。

小さい頃から、おじいちゃんには本当にお世話になっていた。家が近かったため、毎日毎日遊びに行っ、お散歩をして、お菓子を買ってお泊りして、おじいちゃんには沢山お世話になった。大好きで大好きでたまらなかった。

私がどんどん大きくなっていくと、おじいちゃんとはどんどん歳をとった。私は引越して、おじいちゃんの家が少し遠くなった。お散歩もお泊りも、段々少なくなっていた。

ある日、おじいちゃんが入院することになった。「がん」だったみたいだ。でも、おじいちゃんのお見舞いに行ったら、あまり辛そうではなかったから、私は心のどこかで安心していた。だから、おじいちゃんのお見舞いに行くと回数も少なくなっていた。おじいちゃんは、どんどんやせて細くなってしまった。

そして2月14日、あの日 came。私は、午前中はバレーボールに行き、午後からおじいちゃんのお見舞いに行く予定だった。お昼近くなったら、お母さんが迎えに来た。おじいちゃんの状態が、良くないらしくった。家族みんなで車に乗って、急いで病院へ向かった。

しかし、病院に着いた時にはおじいちゃん意識はなかった。普段全然かかないおばあちゃんも、泣きほてたような目で、やさしい表情でおじいちゃんを見ていた。まるで、「頑張ったね。おつかれ」と言っているかのようだった。おじいちゃんの状態を前にしながら、そんなおばあちゃんを見て、もっと悲しくなってきた。そして、涙が

あふれ出てきた。落ち着いた呼吸もできないうちに、胸が痛くて苦しかった。「おじいちゃんおじいちゃん!!」口に出すことはできなかったから、心の中で必死にさげんだ。お母さんもお父さんもお兄ちゃんも、おじいちゃんの兄弟の方々も、みんな泣きながら必死におじいちゃんを呼んだ。しかし、おじいちゃん意識は戻らなかった。

私は、おじいちゃんの「死」、を受け入れるなんてできなかった。だけど、受け入れなければならなかった。

初めてのお葬式で、初めてのことが沢山あった。長い間、お坊さんのお経を聞き、おじいちゃんを花でいっぱい包み、大きなアの中に入れてられた。戻って来たその箱には、骨になったおじいちゃんがあった。姿、形は全くなかった。

最後におじいちゃん笑顔を見たのはいつだろうか。もう一度だけ、おじいちゃん笑った顔が見たかった。もう一生、おじいちゃんとは会えないと考えるだけで、苦しかった。後悔もした。もっとおじいちゃんと一緒に過ごしていたかった。もっと笑い合っていたかった、と。

そして、小学5年生の3月、お父さんの母、私のもう一人のおばあちゃんが亡くなってしまった。やっぱり、大切な人が亡くなってしまうのは、とても苦しかった。もう一人のおじいちゃんは、私が生まれた時からいなかったため、あとはおばあちゃん一人になってしまった。私は、

「もう大切な人を失いたくない!」と心から思った。おばあちゃんだけは、「絶対に大切にしよう」と決めた。

こうして、私は「命の大切さ」をとても深く知った。そして、殺人や犯罪というくだらないことで、

「大切な命を無駄にしてはいけない!」と強く感じた。

だから、私はもう一度言う。そんなくだらないことで、人の「いのち」を「人生」を「夢」を、こわしてはいけないんだ。

こうして、私は一人一人のつづかない「希望の「いのち」」を、大切に生きていこうと思いました。

人とのかわり

優秀賞

私のお母さんは、家の近くのデイサービスで介護の仕事をしています。

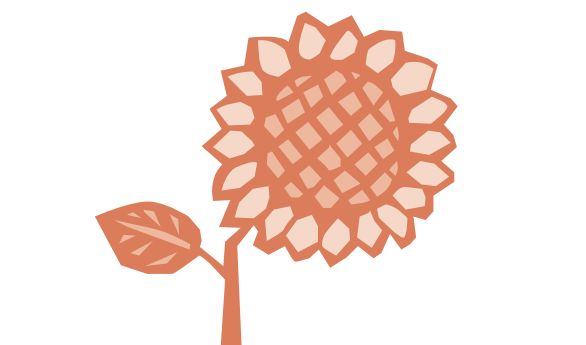
デイサービスは土曜日も祝日もやっているの、私と妹は学校がお休みの日でお母さんが仕事に行く時、たまに一緒にについて行く事があります。

お母さんの仕事は朝八時から始まって、おじいちゃんやおばあちゃんを車で家までかえに行き、夕方送って行くまでの時間に、リハビリのお手伝いをしたりお風呂に入れてあげたり、トイレに一人で行けない人を連れて行ってあげたり、一緒に歌を唄ったりゲームをしたり、折り紙で何かを作ったりもするそうです。

私は車イスのおばあちゃんが頑張って歩く練習をしているところや、右の足も手も動かないおじいちゃんがんばって左で何でも出るように練習しているところを見て、本当にすごいなあと思いました。私は手も足もそろってて体には何も問題がないのに、めんどくさいと思ってやらない事や、いいかげんに何かをしてしまう時があります。がんばっているおじいちゃんやおばあちゃんを見ると、反省してちゃんとがんばらなくちゃいけないと思います。

おかあさんはよく家で、折り紙を使ってクリスマスツリーやかがみもち、おひなさまやこいのぼりなど、季節の物を作っています。それを仕事場に持って行ってかざると、おじいちゃんやおばあちゃんも喜んでくれるそうで、作り方を教えてあげながら一緒に作ってあげると、すごく喜んで家に持って帰って、それを見るお家族の人がすごいねえと言って、とても喜んでくれるそうです。私もよく家でお母さんが作っているのを手伝うで、みんなが喜んでくれてよかったなあと思います。

高松小学校 5年生
うのうら まは
鵜浦 真愛さん



人のために

優秀賞

私のおばあちゃんは私が小さいころに亡くなりました。おばあちゃんは少し遠いところに住んでいて、年に数回しか会えませんでした。会いに行ったときは、私の成長を楽しみにして、とてもかわいがってくれました。おもちゃを買ってくれたり、たくさんほめてくれました。私はそんなおばあちゃんが大好きでした。

私の父の話によると、おばあちゃんは「スキルス性胃がん」という、直す方法のない病気にかかって亡くなりました。そのスキルス性胃がんにかかっている。と知ったときは、もう余命半年だったそうです。おばあちゃんはまず、直すことを考えました。直すことはできないのに。そうこうしているうちに、おばあちゃんの体はどんどん弱くなっていきました。そして、病院にはいり、とうとう歩けなくなってしまいました。ここまで急激に弱ってしまおうと、映画のように、医者に「余命あと六か月です。」

と言われてから、自分のやりたかったことをやる。とか、自分の好きなことをやる。や、人生の最後に一回くらいは人のためになることをやる。なんていう余裕、力、時間がおばあちゃんにはなかったのです。そして、私のもっと長生きしてほしい。という気持ちもむなしく、おばあちゃんは静かに息を引き取ってしまいました。

私は今、とても人生が充実しているように思えます。友達関係も上手にいらっています。「バレー」という自分が熱く、夢中になれることも見つけ日々練習に励んでいます。学校生活もとても楽しいです。ですが、「私は人のために何かやっているか。」と、ふと思ったとき、私は時々、ボランティアを自分から進んでできている、と思いました。とてもそれは良いことだと思います。人のためになることだと思います。でも、

私は連続して、人のためになることをやらなければ、時々では、本当に人のためになることをしていることにはならない、と思いました。

父からきく、おばあちゃんの話はとても私達家族に元気ややさしさをあたえてくれました。少しおおよっぱなところもあるけれど、孫の成長を一番に思ってくれる人だったそうです。私はこういう話を聞いたとき、おばあちゃんは、病院にはいってからは、ボランティアなどの人のためになることは、できなくても、元気ややさしさなどをまわりの人にあたえてくれるという大きな「人のため」になることをしてくれたと思いました。

人のためになにかをやるということは大変なこと、と思う人がいるかもしれません。ボランティアを続けるのは確かに大変です。ですが「人のためになった!!!」と思うときはとても達成感や充実感があります。もし、「人のためになった!!!」と思えることがなくても一所懸命に全力で生きていければ私のおばあちゃんのように、必ずまわりの人に力をあたえられると私は思います。

そして、私は自分の人生を一所懸命に自分の好きなことは、何事にも全力で生きていきたいと思いました。時にはボランティアをして、おばあちゃんのようにまわりの人に力を与えられる生き方をしていきたいです。



一人一人の親切

優秀賞

ぼくは、人から人への親切がないと、住み心地のいい世界にはできないと思います。

例えば、友達が重そうな荷物を持っていたとき、「いっしょにもってあげるよ。」と言ったら、「ありがとう。」と友達はいってくれました。また、電車の中で、「こすわってください。」とぼくが話しかけたら、「どうもありがとうね。」とおばあさんがお礼を言ってくれました。どちらもぼくは、勇気をだしてやってよかったなと思いました。

このように親切にしたことがいろいろな人を住み心地のいい世界にしてくれます。

また、あいさつもいろいろな人をいい気持ちにすることができます。

朝、マンションのエレベーターの中で人に会った、「おはようございます。」と僕は言います。すると、「おはようございます。」とあいさつを返してくれます。

また、ぼくの通っている小学校では、「あいさつりんご」というものがあります。あいさつりんごのバッヂをつけて、朝、しょうこう口のところで、「おはようございます。」と当番の人が声をかけてくれます。ぼくも、「おはようございます。」と言います。このあいさつをする、1日が始まったなあという気分になります。

だけど、ぼく一人でがんばっていても、住みごこのいい世界にはなりません。そこで一人一人がおたがいをおもいやらなければいけません。

以前、こんなことをしてくれる人がいました。電車で乗ったとき、中は人がたくさんいて、すわれません。ぼくがつかれてきちんと立っていられなかったとき、

富士見台小学校 5年生
きたむら しょうや
北村 奨也さん



男の人が、「すわっていいよ。」と声をかけて、席をゆずってくれました。ぼくは、「ありがとうございます。」とお礼を言いました。

また、ぼくが道にまよってこまっていたとき、「どうしたの。」と声をかけて、行きたい場所まで案内をしてくれた人もいました。

このように、親切なことをしてくれる人もたくさんいます。親切なことをしてくれる人がふえればふえるほど、住みごこのいい世界になります。

その一方、人に悪いことをする人もたくさんいます。このような人がたくさんへるにはどうすればいいか、ぼくは、悪いことをする人に親切なことをすれば自然と少なくなるそう思うのです。

だから、日ごろからいろいろな親切をすれば、きっと悪いことをしている人にも伝えられると思います。

そして、毎日いろいろな親切をたくさんしていきたいなと思います。

そして、より住みやすい世界をたくさんの人で作ってきたいなと思いました。



自分自身の力

優秀賞

千登世橋中学校 2年生
かんほ
塚田 侃菜さん



そうです。1日に80人。20分に1人の割合で自殺者が出ている計算になります。交通事故による死亡者が年間1万人ということは、その3倍というびっくりする数字です。学生、生徒の自殺者は約900人。その内、人間関係を原因とする自殺は約90人で、年々増加しているそうです。表沙汰にはなってなくても、いじめが原因で命を絶つ人がもつというような気がします。

人は人を好きになります。でも、全てにおいて合う人を見つかったり、完璧な人間関係をつくることは不可能だと思います。どんなに好きでも、嫌なところがいっつかあるのが普通なのでしょう。でも逆に考えてみると…嫌いな人にもいいところがあるはず。そのいいところをたくさん見つけて、嫌いな人を嫌いじゃなくできれば、いいのではないのでしょうか。たしかに、それは難しいことだと思います。しかし、不可能ではありません。人をからかっている友だちを見たら、一緒に笑うのではなく、からかわれている人の身になって、よく考えます。

「いじめ」になっていると思ったら、見て見ぬ振りはないで、勇気をもって注意します。まずはわたし自身から、そしてわたしの仲の良い友だちがそうすることで、いじめは日々、少なくなっていくのではないのでしょうか。

好きな友達嫌なところ、嫌いな友達の嫌なところばかりを見たら、良い友達関係なんか一生つくれません。逆に自分はどうなのか考えるべきです。でも、そんなことをやっていたら、きりがありません。

そこで私は、多くの人の好きなところをたくさん見つけて、私もみんなから私の好きなところをたくさん見つけてもらい、素敵な仲の良い友だちをこれからつくっていくと思います。

自分の力を信じて一人一人が「人」を大切に、これからの人生を明るくしていけるようにしよう。

小さないのち

優秀賞

私は、虫を観察したり、その虫のことを調べたりすることが大好きで、低学年のころはかたつむりやだんごむし、あおむしを飼っていたこともあり。友達には「気持ち悪い」だとか言われるけれど、「小さないのちを自分があずかっている」と思うと楽しくてしょうがなかったのです。あまり虫の知識は無かったので、その虫のエサなどは、テレビで見かけたらそれを取り入れる程度でした。そのせいか、自然からはなされてしまった虫たちは、私のせいで死んでいってしまいました。正直、低学年のころは、「どうして死んでしまったのか」ということは理解してはいたけれど、死んでしまったら「あーあ。」と残念な気持ちでいるだけでした。

ある日、三人の友達と下校中、一人の子が「こんなところに貝があるよ」と道ばたに指をさしました。「こんなところに貝がらなんてあるのか」と私は半信半疑でそこを見みると、一びきのかたつむりでした。その友達は初めて見るらしく、不思議そうにかたつむりをながめていました。かたつむりがからから出るゆんかんを四人で待っているとき、私が「せっかくだから名前をつけようよ」と提案しました。さんせいしてくれた三人は、名前を考え始めました。一人目は少しふざけて、「そぼろ」という名前の案を出し、私もそれにたづられて「さぶろう」という名前を出し、もう一人は「かたつむりはニョッキと出でくるところだ」ということで、「ニョッキ」という案を出しました。あとの一人は、思い浮かばなかったそうです。どれもユニークでおもしろかったので、その三つの案を合体させて、「そぼろニョッキさぶろう」とおもしろ半分でつけました。すると、一人が「また飼ってみれば」とすすめるので、またかたつむりを飼うことにしました。「家に帰る前に風でニョッキさぶろうがかわいてはいけな」と、一生けんめい風から守りぬきました。そのすすめた友達と私の家の前で別れる前に、その友達が、

「かたつむりの様子をカメラでとって送ってくれ」と言いました。家の中に入って、虫ごか水そうを探しましたが、ありませんでした。家の中でニョッキさぶろうの家になるものをさがしてみると、ちょうど、ちいさい時に使っていた、古いお弁当箱を使いました。それはどう明だったので、観察もできそうでした。そこにしめさせたキッチンペーパーと葉を一枚入れました。でもかたつむりはコケを食べる、ということテレビで見たことがあり、コケはどうすればいいのか考えました。「そういえば、初めてかたつむりを見つけたのって、家のとなりの中学校だったかなー」私は、その中学校にかたつむりがいたことから、そこにならコケがあるんじゃないかと、考えました。「でもコケの中にはクマムシがいたな…」私は、そんな情報をとっさに思い出しました。もし仮に、そのクマムシがお弁当箱から出てきてしまったらどうしよう、とてもこわくなりました。だからと言ってニョッキさぶろうにエサをあげないわけにもいきません。私はどうしたらいいのか考えると、低学年のころのことを思い出しました。「知識の無い自分が虫たちを殺してしまったー」急に、そんな私がなさけなくなりました。このことによって家族にめいわくをかけていることもそうですが、小さな命を次々と消してしまっている…私は最初のかたつむりを見つけた中学校にニョッキさぶろうをかえしました。少し残念な気もしたけれど、「これで子孫を残してくれるかもしれない。」とほんとうに少しだけ、さすがしく思いました。

私は本当にいけないことをしたと思います。今まで飼ってきた虫たちに何度謝っても足りないほどです。虫がすきだからこそ、こんなことを思うのかもかもしれませんね。これからは、その虫たちが幸せにくらしてくれるように、うまれてきてくれた子孫、うんでくれた先祖に感謝して、生き物を大切にしていきたいです。

「挨拶・笑顔の大切さ」

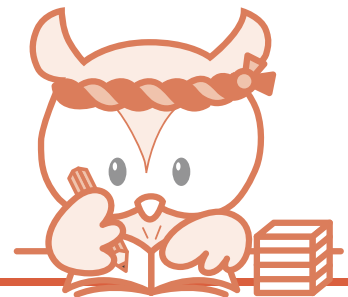
優秀賞

巢鴨北中学校 3年生
たかはし あやね
高橋 彩音さん



社会を明るくするためには、「挨拶」「笑顔」が大切だと思う。一日は、朝の「おはよう」から始まる。学校へ行ってからも、「おはよう」を繰り返す。挨拶を通じて友達になった子もいる。学校には「あいさつ運動」がある。私は、皆に名前を呼ばれ、「おはよう」と言われて嬉しかったことを覚えている。「挨拶」とは軽そうに見えて、実はかなり重い物なのだと分かった。挨拶をした・しなかった・された・されなかっただけでも大きく違うものなのだ。私は、家族、地域の人びとに「挨拶」をしてもらえ、周囲の雰囲気だって、暗くなってしまふ。そのために、笑顔でいる。また、彼らは相当つらかっただろう。だが、つらい事を顔に表していても、「やっぱり、つらいんだ」としか思われない。笑顔だったら、どうだろうか。「あんなに笑って、私たちも応援しなくちゃ」と考え方が変わると思う。私だったら、変わるだろう。もし、この世界に「挨拶」「笑顔」がなくなってしまうたら、どんな世界になるのだろうか。きっと、何も楽しくない、誰も笑わない、荒れ果てた土地のようになってしまふ。このような世界になってしまったら、困る。様々な音、声・様々な笑顔、人・様々な国があって、世界・地球が成り立つのだ。社会を明るくするためには、私の力だけでは足りない。この国全体、この世界全体で、行動できることをするべきである。それが毎日を「挨拶」で始め、「笑顔」で過ごす。この2つを決して忘れてはいけない。

勝たなくてはならない。先生の言っていた通りだった。このような事から、「笑顔」になるためには、「気持ち」が大切なのだと学ぶことができた。そして、2011年3月11日。東日本大震災。ニュースや新聞では、現場の状況だけでなく、子供たちの笑顔の映像が写っていた。被災者でもある彼らの笑顔を見て、色々な事を思った。なぜ、笑顔でいられるのだろうか？ つかぬのか？ 私だったらどうだろうか？ その答えは色々な人の「笑顔」を見ていて分かった。暗い顔をしていたら、周囲の雰囲気だって、暗くなってしまふ。そのために、笑顔でいる。また、彼らは相当つらかっただろう。だが、つらい事を顔に表していても、「やっぱり、つらいんだ」としか思われない。笑顔だったら、どうだろうか。「あんなに笑って、私たちも応援しなくちゃ」と考え方が変わると思う。私だったら、変わるだろう。もし、この世界に「挨拶」「笑顔」がなくなってしまうたら、どんな世界になるのだろうか。きっと、何も楽しくない、誰も笑わない、荒れ果てた土地のようになってしまふ。このような世界になってしまったら、困る。様々な音、声・様々な笑顔、人・様々な国があって、世界・地球が成り立つのだ。社会を明るくするためには、私の力だけでは足りない。この国全体、この世界全体で、行動できることをするべきである。それが毎日を「挨拶」で始め、「笑顔」で過ごす。この2つを決して忘れてはいけない。



思いやりの心

優秀賞

南池袋小学校 6年生
田中 杏菜さん

私は、社会を明るくするためには、世界中の人が、「思いやりの心」を持つことが大切だと思います。

理由は、五年生のときに思いやりをしてもらったことをまとめていたらだんだんみんなに優しく接することができるようになったからです。世界中の人たちが思いやりの心をもったら、平和で明るい社会になれると信じています。

でも、今の社会は人によって態度を変えたり、人種差別をしたりしているのでまだ思いやりの心をもっている人は、少ないと思います。だから人に優しくしたり、頼りにしてもらったりすると自分までうれしく、明るい気持ちになるということをみんなに知ってもらいたいです。

だけど、私も今までは、あまり仲が良くない子と遊ばなかったり、一人の子がいても無視したりしたことがありました。でもそういうことをすると、相手を傷つけてしまうし、友だちにもどんどんきらわれていくんだ、ということを先生に教えてもらったからやらなくなったんだと思います。

だから、世界中の人たちに、いじめをしりするのはいけない、ということを伝えたいです。

けれど、一人か二人でいきなり思いやりの心をもつと、他の人はいやな目で見られたりするかもしれないと思う人もいます。だけどそこは勇気をだしてほしいです。正しいのは自分だから、と思っていればきっと気付いてくれると思います。

それでもいじめてくる人は、それなりの理由があってやっているのだと思うのでその子に話を聞いたりして心を開いてあげて下さい。

そして、みんなが思いやりの心をもてば、世界中が明るくて、仲がよくなると思っています。

ちなみに、思いやりという言葉を国語辞典で引くと、「あいての身になって考えること、またその気持ち。」とあります。

これを見て私は、なるほどと思いました。なぜなら予想どおりだったからです。

でも、分かっている、これが大切だとわかっていても、いじめをしてしまう人がいるのだということを考えると悲しくなります。だから、みんなが思いやりの心を持ち、世界を平和にできる日がくることを願っています。

差別について

優秀賞

南池袋小学校 6年生
近藤 和花さん

私は、四年生の最後、みんなからさけられていました。親友だった子が他の友達といるようになって、ケンカしたわけでもないのに、ケンカした。ウザイってみんなに言って、私をさけていました。

でも、親友と仲のよかった、一人の友達に相談したら、優しく相談ののってくれて、できかぎり一緒にいてあげるって言われて、安心しました。お母さんにも相談して、色々やってみたけれど、やっぱり前みたいには仲良くできなくて、ある日、一人でいてその子達の方に入ったら、「和花きたからいこっ」って言われて、その子達にさけられました。それを見ていた先生にどうしたの?っていわれたけど、なんでもありませんって言って、その日を終えました。

そして、お母さんに相談したら親友だった子のお母さんに手紙を書くって言って、手紙を書きました。

したら、電話がかかってきて、お母さんどうして話して、私と親友だった子で話しました。

すると次の日からさけられることはなくなりました。なので、今は学校にくるのが楽しいし休み時間も楽しいです。

私の中でさけられている時、支えになったのは親友だった子と仲の良かった一人の友達の言葉です。

私がその子に相談したら、その子は、「みんなが和花の事キライでも、私は和花の友達だし、和花の事、ずっと大好きだよ」って言うてくれました。その言葉が私の事を支えてくれました。

きっとその子は私の事を本当は好きじゃなかったと思います。

でも、その言葉がうれしかったです。

今は親友が二人います。それは四年の、最後にわたしからはなれた、親友。と、今、同じクラスのなやみができたらゆいいつ、相談しよう、って思える人です。

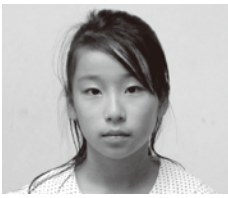
私は人を差別するっていう話を聞くと、今までの事がうかんできます。前は白人が黒人を差別していたってきくと、私はしないようにしよう。って思います。

これから、もし、そういう事があったら、私がとめたいて思います。

差別されたり、さけられたりすると、なんで私なんだろうって思うから、私は人を差別したりはしないようにしたいです。

ポイ捨てとあいさつ

優秀賞

池袋第二小学校 5年生
村上 汐南さん

私は、ときどき、タバコのポイ捨てや、ゴミのポイ捨てなどをしているところを見かけます。ときには、けむりがついているのも落ちていきます。とてもあぶないと私は思います。ポイ捨てをしたら、町もどんどんきたくなっていってしまいます。私は、小さい時に、うち園に行くときに、何こタバコが落ちていくか数えてみました。予想は十こくらいでしたが、十こ以上落ちていました。そのとき、私は、どうしてこんなにタバコが落ちているのだろうと思いました。私は悲しくなりました。ときには、つばをはく人だっで見かけます。とてもきたないので、私は、いやな気持ちになりました。自分はいやじゃないかもしれないけど、周りの人たちにはいやな気持ちになるからです。でも、そういう物を捨てる人がいて、私はとてもありがたいと思います。落ちていくゴミも、前より少なくなったと思います。私も、そういうボランティア活動をしてみたいと思います。五月には、ゴミゼロデーがあります。学校では、ゴミゼロデーに、ゴミを拾ったりします。その時に、ゴミをいっぱい拾いたいと思いました。そして、みんながいい気持ちでくらせる社会にしていきたいと思いました。そうするためには、私は、大人になっても、ポイ捨てをしないように、努力したいと思いました。

私は、あいさつも大事だと思いました。なぜなら、あいさつをされたりすると、いい気持ちになるからです。あいさつをしない人は、なんだか暗く見えます。毎日、あいさつをしていたら、前の校長先生に、ほめられたことがあります。そのとき、私は、とてもうれしくなりました。毎日あいさつをしていると、こんなにうれしくなるときがあるんだ、と思いました。それから、近所の人にもあいさつをするようになりました。笑顔であいさつをしてくれます。あいさつをしたら、そこから会話が始まりました。短い会話だけど、楽しいなと思います。やっぱりあいさつはいいなと思います。最初は、はずかしくて出来なくて、頭を下げるだけだったけど、思い切ってやってみたら、出来るように、なりました。それから、近所の人たちと話す機会がふえました。学校に行く時に、いつもあいさつしてくれる人がいると、学校に気持ちよく登校出来ます。学校の先生にもあいさつをしたら、やっぱり、笑顔で、あいさつをしてくれました。あいさつを、大人になっても、いっぱいしようと思いました。

私は、この作文を書いて、ポイ捨てしないこと、あいさつをすることが大切なんだと改めて思いました。そして、大人になっても、気を付けようと思いました。この作文に書いたことを、未来に生かしていこうと思いました。

命を守るためには…

優秀賞

池袋第二小学校 5年生
藤原 秀さん

僕は、今まで「いのち」について考えたことがありませんでした。でも、「いのち」は、とても大切なものであるということだけは確かな事だと思います。

昨年の三月十一日に起きた東日本大震災ではたくさんの命が失われました。津波によって一瞬にして家族をうなった人々や福島第一原子力発電所の放射能漏れにより住み慣れた町を避難せざるを得ない状況により地域住民や友人・知人とばらばらになってしまった人々をテレビや新聞の報道で見て、「いのち」というものは、自分のものだけ自分だけでは守りきれない時もあること、家族だけでなく他人と助け合わないといきでいけないという事を強く感じました。そのようなことから地域の人々と助け合える関係を普段から築いていくことがとても大切な事だと思いました。

僕は祖母から面白い話を聞いたことがあります。それは、昔は味噌や醤油が足りないときは、近所の人に分けてもらったといいます。でも今は、近くにコンビニエンスストアがありいつでも買い物ができるのでこのようなことはなくなりました。便利になるのはいいことですが近所の人とのコミュニケーションが減っていることはよくないと思います。

僕は町会の野球チームに所属しています。そのおかげで自分の所属している野球チームのメンバーだけでなく、外のチームの選手やその保護者の人たちも沢山知り合う事ができました。また、僕は父と毎朝、家の前でキャッチボールをしています。出勤する人や犬の散歩をする人・ゴミ出しや掃除をする人などにあいさつをするように心掛けていたらお互いに顔見知りになり地域の輪が広がったような気がします。最近では自宅から離れた所で会っても声を掛けてもらえるようになりました。

学校では、「あいさつをなさい」とよく言われますが、今までなぜ、あいさつが大事なのか意味がよくわかっていませんでした。でも、声を掛けてもらえるようになって、あいさつの大切さを実感することができました。また、人と人との繋がりというものは日々の小さな積み重ねにより作られていくものだと思います。

震災により、大きな被害を受け、多くのものを失いましたが、僕を含めて「いのち」というものを考えるきっかけとなったと思います。

人と人との繋がりを地域だけでなくどんどん広げていくことができれば、何かあったときにはお互いに助け合うことができ、その力もとても大きなものとなります。そして、人と人との「きずな」が生まれれば、犯罪や非行のない明るい地域社会が作られていくと思います。

これらを踏まえて僕は、「あいさつ」という日々の小さな積み重ねを今まで以上に大切にしていきたいと思います。

「いじめ追放への近道とは…」

優秀賞

巢鴨北中学校 3年生
小田 祐太さん

僕が、社会を明るくするために必要だと思うことは、人をバカにしないことによつてのいじめ追放です。そもそも、いじめの発端というのは、小さなことです。例えば、運動が苦手だからといって、バカにしたことがきっかけでいじめにつながることもあります。また、極端な話、学校を何日か休んだだけで仲間はずれにされ、いじめになる場合だってあるのです。大きくなつてしまえば、仲間はずれや、いじめだって一種の差別です。小さいいじめが、やがて大きな差別になるのです。僕は、そんな差別があふれるクラス、学校、世界は絶対に嫌です。その差別を無くするために必要な第一歩が、人をバカにしないことなのです。

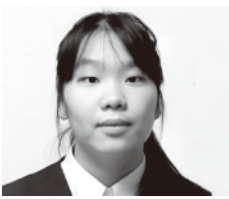
ことわざに、「十人十色」とあるように、人間には一人一人才能や、個性があります。それは、一人一人違うのです。いろんな色があるからきれいに見えるように、色んな種類があるから楽しいように、人間にもさまざまな色や種類があるのです。それを、自分やみんなと違うからといってバカにするのはおかしいと思います。全く同じ人間なんて、この世に一人もいないのです。自分という色があるから、他人という色もある。この考えが常に頭のどこか片隅にでもあれば、いじめや差別は起こらないのではないかと思います。

僕も、実際に人をバカにしてしまったことが何度もあります。しかし、後悔しなかったことは一度もありません。何度も何度も後悔してきたからこそ、他人に同じような思いをさせたくないのです。最近では僕も、十人十色という言葉を実心に刻んで、人をバカにすることもなくなりました。だから、他の人にも伝えていきたいと思っています。それが、今まで人をバカにしてきた罪のせめてもの償いであると思うからです。

いじめは、本当に小さなことで無くすることが出来ます。人をバカにしないで、個性や色を大切にすることが、いじめ追放への一番の近道ではないかと僕は思います。

「社会を明るくする人達」

優秀賞

巢鴨北中学校 3年生
日塔 唯華さん

私が社会を明るくするのに必要なのは、「友達」だと思います。どんなに経済や、日本の悪い問題がなくなっても、その幸せや楽しみを分かち合う友達がなければ楽しく、明るくは生きていけないと思います。

私にはとても大切な親友がいます。その親友と出会ってから私は楽しいことも嫌なことも共に過ごしてきました。私がもし親友と出会っていなかったらどんなに明るい社会でも、今まで以上に幸せな人生を過ごせなかったと思います。その子が笑い、喜び、楽しめば、私も笑い、喜び、楽しいです。私は高校生、大学生、大人、おばあちゃん、どんなに年をとっても親友や他のたくさんの出会ってきた友達と一緒に楽しく生きていきたいです。

私もう一つ社会を明るくするのに必要なのは、「家族」だと思います。私という命を生んでくれた両親や、色んなことを学ばせてくれた兄など、親友と出会えたのも、生んで育ててくれた家族のお陰です。前読んだ漫画で世界で一番強いのはお父さんとお母さんを書いてありました。理由は、強いプロレス選手も、すごい学者も、お父さんとお母さんがいないと生まれてこなかったからだそうです。だから、世界で二番目に強いのはお父さんとお母さん候補の愛し合う二人となっていました。その考え方や愛し合う二人も、社会を明るくするのに必要だと私は思います。

なので私は、社会が明るくなるのに必要なのは、「友達」「家族」「愛し合う二人」などの「人達」だと思います。社会を明るくするのは、社会を作る人類です。なら、明るくするのと同じ人類で、その中に私がさきあげた人達も含まれているのではないのかと、私は思います。

私の、明るい社会とは、友だちや家族と楽しく、仲良く、幸せに過ごして、世界中の人々が家族を大切に、幸せに過ごしている社会。こんなに素敵な社会は無いと思います。みんなの考える明るい社会はどんなものなのか、想像するのが楽しいです。みんなでも出しあったキーワードを見ると、私では思いつかない意見などがたくさん見られて、とても楽しかったです。また、クラスの友達と社会を明るくするには何が必要なのか話しい、素敵な意見を聞きたいです。

地域とのつながり

優秀賞

明豊中学校 1年生
白田 海斗さん

ばくのお母さんは、町会のボランティア活動を生けん命がんばっています。ばくは、どうしておかあさんがボランティアをやるのか考えることもありませんでした。

この作文をきっかけにお母さんの本当の気持ちが分かりました。その理由とは、地域の人と仲良くなるのはもちろんのこと、ばくと弟の顔を覚えてもらって、声かけをしてもらうことが目的でした。

お母さんが町会のボランティア活動をやってから、まえより地域の人にあいさつをするようになりました。地域の人たちもばくの顔を覚えてくれて、相手からもあいさつされるようになりました。ばくは、自分からあいさつをするのではなく、相手からあいさつしていたけれど、現在は自分からあいさつができるようになりました。

じゅくて、帰りがおそくなり、心細くなった時、町会の人から声をかけられ、安心できたし、とてもうれしくなりました。

ばくが自転車のルールを守らなかったとき、町会の人たちが注意してくれたりして、安全に遊ぶことができました。ばくは、周りの人からあまりおこられないけれど、町会の人たちは、きちんとしなつてくれました。時間を忘れておそくまで遊んでいた時も注意してくれて、早く家に帰ることができました。小学校を卒業する時や中学校に入学した時におめでどうと言われて、うれしくなりました。

ばくは、地域の人たちのおかげで、毎日安全に過ごすことができています。町会の人たちがとてもやさしくて良かったなと思いました。

地域の人たちと仲が良くなると、一緒に遊んでくれたりして、とても楽しくなります。

もし、お母さんがボランティアをやっていなかったら、こんなに楽しく過ごすことはできなかったと思います。なので、地域の人とのつながりは、とても大切だなと思いました。

町会の人たちのおかげで毎日安全に楽しく遊んだり、祭に参加したりできるので、地域とのつながりをこれからもずっと大切にしていきたいです。そして、町会の手伝いなども積極的にしていきたいです。

地域の人がたくさん人の顔を知っていることにより、見知らぬ人がうろろしている、すぐに不しん者かなと判断することができます。そういったことにより、犯罪の少ない町づくりになると思います。

良い社会とは

優秀賞

千登世橋中学校 2年生
花澤 優里さん

「社会を明るくする運動にご協力をお願いします。」

毎年七月に大きな声でそう言いながら、犯罪や非行を防止し、立ち直りを支えるために「おかえり」や「やり直せる社会に賛成です」などのメッセージ書かれたティッシュや絆創膏を町の人々に配っています。この活動の目的を私は小学校四年生ぐらいになって、やっと知りました。知った時には、立ち直りを支えるとは、自分がどうすればいいのかわからずとても難しいな。と思っていました。でも、「難しく考えないで、今はたくさんの人と共に生きていくために必要だと思うことをしていけばいいと思う。」と知り合いの人が教えてくれました。その時、ずっと前に小学校の先生から聞いた話を私は思い浮かべていました。

朝のとても混んでいる満員電車の中でのことだそうです。とても混みすぎていて、乗るのにも、降りるのにも苦労していました。ほとんどの人は無言で、無理矢理出たり入ったりして、ある時、降りようとして人をおしのけている人がいたそうで結局、その人は降りようとした駅で降りられませんでした。次に、少し若い男の人が乗ってきて、降りる時にはドアからだいぶ遠ざかってしまっていたけれど、「すみません。降りたいので通していただけませんか」と何回もていねいな言葉で言っていると、細い道がドアまでできたそうです。

先生は話しかけると、「きちんと言葉で伝えるということは、とてもたいせつだと思います。」と言っていました。私も、似たようなことが前にあって、逆にそういう人を見ていて、私まで気持ちが良くなるような気がしました。

そして、先生は、「何か言いたいと思った時は、一度心の中で言い方やどう伝え方がいいのかなどを考えてから自分の言葉に責任をもって話すようにしていきましょう」と最後に言いました。

私は、人との接し方・話の聞き方・自分の意見の伝え方などに気を配ってコミュニケーションをとることで、周りの人とい関係が築けていけるのだと思います。良い社会とは誰かが私たちに与えてくれるものではなく、みんなが努力して作り上げていくもので、続けていくためには一人一人の小さな気配りがかかせないなと思いました。私もこれからずっと、誰とでも誠意をもって接していきたいです。



豊島区制施行80周年記念事業

第62回 “社会を明るくする運動” 中央大会
「区民のつどい」

7月21日(土)に中央大会『区民のつどい』を開催しました。

区では、“社会を明るくする運動”の趣旨を広くPRするために、毎年強調月間の7月に中央大会『区民のつどい』を開催しています。第62回を迎える今年は、“不良少年更生の父”と呼ばれた留岡幸助の一生を追う映画が上映され、更生保護はもちろんのこと家庭の重要性を考える機会となりました。

第 1 部

今年度も『いのち』を題材として、作文コンテストを実施し、区内小中学校のみなさんから1415点ものご応募をいただきました。その中から優秀作品として小中学校各10作品の表彰を行い、上位各2作品については作品を発表してもらいました。

今年度は、身近な出来事をテーマにした作品が多くみられました。家族の死や地域の人々との関わりなど、それぞれの体験から「いのち」の大切さについて考えていたようでした。それぞれの体験や意見を堂々と発表する姿は、会場の人々の心をつかみ、改めていのちの大切さを考えるひとときとなりました。

第 2 部

映画「大地の詩—留岡幸助物語—」は、留岡幸助という人物の一生を題材とした作品です。この作品は昨年2011年に公開され、更生保護という面だけでなく子どもにとっての家庭の大切さが表現されています。また、留岡氏は北巣鴨に「家庭学校」を作り、愛を持って非行少年の教育にあたりました。上映中は会場全体が映画に引き込まれ、観客の方々からは「感動した」、「家庭の大切さを思い知った」、「より多くの人に見てもらいたい」という感想が寄せられました。留岡氏のような子どもの健全育成を担う人々の存在や、その大切さ、そして“社会を明るくする運動”の趣旨を知ってもらうきっかけとなりました。

当日は雨模様だったのににもかかわらずたくさんの方々においでいただき、盛況の中で中央大会「区民のつどい」を終えることができました。

豊島区制施行80周年記念事業
第62回“社会を明るくする運動”
中央大会「区民のつどい」 次第

第1部 セレモニー

作文コンテスト表彰式
作文コンテスト推進委員長賞・
常任委員長賞作品発表

第2部 映画上映

映画「大地の詩—留岡幸助物語—」の上映



©現代ぶろだくしょん

あらすじ

岡山県高梁市に生まれ、幼くして商家の養子になった幸助は、ある日、金持ちの武士の子に殴られるが、相手を打ち負かしてしまう。そのことで実家は得意先を失い、父から折檻を受け、学校を退学させられたあげく商人になることを強いられた幸助は、幼くして不平等な身分社会に憤りを感じる。

青年になると幸助はキリスト教へ入信し同志社英学校（神学科）へ入学する。

卒業後、教会の牧師となって、多くの人に信頼されていた幸助だったが、明治24年、妻子を連れて北海道・空知にある監獄の教誨師に就任する。

その頃、空知の監獄では、囚人たちが強制労働などの過酷な刑罰を受けており、幸助は、そのあまりにも酷い仕打ちに義憤を感じ、監獄改良を叫ぶ。

囚徒の過去を調査し、犯罪の芽は幼少期に発することを知り、幼い頃の家庭教育の大切さに気づく。幸助は教誨師を辞めると、米国に渡り欧米の監獄事情を学ぶ。そして帰国後、少年感化を実現すべく、北巣鴨の一角に『家庭学校』を作り、広く感化を要する子弟を教育、少年感化事業の先駆者となる。

後に巣鴨の地が都会的になると、ルソーの著書「エミール」に書かれた『子供を育てるには大自然の中が一番』という説に感銘を受け、北海道・遠軽の地に家庭学校を作る。

その教育は、21世紀となった今もお受け継がれ、その土地は留岡という地名になって現在に至っている。

こんなPR活動が行われています

中央大会のほかに、地区大会として区内12の地区でさまざまなイベントを実施し、“社会を明るくする運動”のPRに取り組んでいます。24年度の各地区の代表的な取り組みをご紹介します。

第1地区 夏休み子ども広場

第2地区 七夕お楽しみ集会

第3地区 ミニ縁日と花火大会

第4地区 和菓子を作ってみよう

第5地区 山手線一周歩け歩け大会

第6地区 七夕まつり

第7地区 鼓笛隊パレード

第8地区 ハチハチ祭り(七夕飾りと縁日)

第9地区 全校清掃

第10地区 夏の縁日と音楽会

第11地区 地域清掃とサマーコンサート

第12地区 ミニ縁日・コンサート